

復活節にあたって—ペトロの場合—

学院長 嶋 田 順 好

前々号では「多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」イエスの救い主としての使命を12弟子たちが全く理解せず、ただ「仕えられる」者になりたいとの一心で互いが足を引っ張り合い、権力闘争に明け暮れていた姿を確認しました。また前号では、ペトロが大祭司の屋敷で周りの者から「あなたもあのナザレのイエスと一緒にいた」と三度詰め寄られると、ついには「呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い』」つつ、イエスを否んだ事実を確認しました。十字架を前に弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げ去り、その集団は壊滅してしまったのです。

ところが、イエスの死後ほどなく失意のどん底にいたはずの弟子たちが、圧倒的歓喜に捕らえられ、共に集い、イエスをまことの神の子、救い主として力強く宣べ伝え始めたのです。彼らは、投獄されても、鞭打たれても、ついには殉教の死を遂げることになっても、二度とイエスの弟子であることを否認しない人間に変えられたのです。そしてイエスが愛してくださったように互いに愛し合い、イエスを救い主と告白する者たちの共同体を築いていきました。この一切の出来事の背後にイエスの死人の中からの復活という出来事があったのです。

ヨハネによる福音書21章15節以降には、復活されたイエスがペトロに三度「わたしを愛しているか」と問われる場面が登場してきます。一度二度と問われ、その都度「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です」と応答したペトロです。ところが、三度までも問われてペトロは「悲しくなった」とあります。どうして、ペトロは悲しくなったのでしょうか。イエスが自分の応答を認めてくれないことに苛立ち、悲しみを覚えたのでしょうか。断じてそうではありません。彼はイエスから三度愛を問われて「愛しています。愛しています。愛しています、主よ」と答えながらも、まさにそのことにおいて三度激しくこの方を否んだ自分の姿を思い起こさずにはいられなかったのです。

しかし、なんと驚くべきことでしょう。そのペトロに主イエスは何の咎めだてもせず、ご自身がこれまで貫いてきた最も重要な使命を託されたのです。「わたしの羊を飼いなさい」と。これはまさに驚くべき恵み、驚くべき赦し、驚くべき愛、そのものではないでしょうか。

もし人間的に誠実なペトロならこのイエスのご委託を、次のように断るべきだったのではないでしょうか。「わたしはかつて『たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません』と大言壯語しました。にもかかわらず、見事に三度あなたを否みました。そんなわたしですから、いま『あなたを愛しています』と言っていても、その約束を貫けるかどうか自信がありません。ですからあなたのご委託を担うことは到底できません」と。

しかし、その使命をペトロは受け取ります。なぜでしょうか。それはペトロが変えられたからです。「もし、わたしが羊を飼う使命に生き得るとしたら、破れと弱さと罪のなかにあるこのわたしを、復活のイエスが決して見捨てず、絶えず自らのうちに宿る罪に勝ってはるかに大きな愛をもって支えてくださる。だから、わたしは羊飼いとして立ち得えます」との信仰を見いだしていたからです。

ヘンリック・シェンケビッヂの『クオ・ヴァディス』という小説は、アッピア街道上の有名な故事にならって生み出された文学です。その小説の最後の方で、ローマ皇帝ネロの迫害のなか、ローマから逃亡するペトロの姿が描かれます。恐れと不安に捕らえられてローマからひたすら離れて行こうとするペトロに、反対の方向からローマに向かう人影が迫ってきます。それは復活のイエスでした。それが「イエスだ」と分かるとペトロは驚き、喜び、ひざまずきます。その時、ペトロの口について出た言葉が「クオ・ヴァディス・ドミネー主よ、何処へ行きたもうー」という問い合わせでした。そのペトロに向かってイエスは、「なんじ我が民を棄つる時、我、ローマに往きて再び十字架に懸けられん」と語りかけます。そのあと立ち上がったペトロは一言「ローマへ」と低く呟くと、自らの十字架を担うべく元の道を戻つて行つたのです。聖書には記されていない伝承です。しかし、思わず「きっとそうだったろうなあ」とうなずかずにはいられない伝承です。